

日中経済交流研究会新聞

日中経済交流研究会 2023年2月1日(水)

これから日本の中小企業が海外進出していくために今できること・すべきこと

～多様性を受け入れながら、これから日本は世界の中でどのように生きていくのか?～

パネリスト

関口 倫紀 氏

水野 透 氏

高橋 祐子 氏

合田 研吾 氏

ファシリテーター

津川 礼至 氏

コーディネーター

廣瀬みゆき 氏

京都大学経営管理大学院・大学院経済学研究科教授

(株) 渡辺工業 代表取締役会長

日本精機(株) 代表取締役

オーツケミカル(株) 代表取締役社長

(株) 津川製作所 技術統括

(株) Pink Rose 代表取締役



日中経済交流研究会2月例会は、広報委員会がインタビュー取材してきた中から特にたくさんの人に聞いてもらいたい多様な分野でご活躍の4名の方をパネリストに招きトークセッションを行う形式で、まさに年度末にふさわしい例会となりました。

三つのテーマごとに、パネリストの方々それぞれの立場や経験からのお考えをご紹介します。

テーマ①「日本人と外国人が一緒に同じ会社で働くにはどうすればよいのか？」

水野氏(工場従業員の半数近くを外国人雇用)：日本人の従業員と特に区別はしていない。慰安旅行も一緒。日本語教室も開催している。外国人の中でも南米と東南アジアでは文化も考え方も違う。どちらが正しいという判断ではなくそれぞれの文化を理解することが大切である。

関口氏(学生の中に留学生が多数)：研究室の共通言語を英語にして、日本語が話せなくても授業に参加できるシステムを構築している。日本人は英語が苦手な人が多い。

高橋氏(5人の外国人研修生を雇用)：当初は「郷に入れば郷に従え」で日本の風習に合わせてもらうようにしていたが、彼らの文化(宗教的なことも含めて)をリスペクトして交流を深めるように変化した。

合田氏(エンジニア枠で外国人を長期雇用)：ベトナム出張で外国人雇用を決断。当初日本語はできなかったが、技術力の高い人に恵まれた。日本人の従業員も積極的に交流し、人間関係のつながりがうまくいくと退職せずに長く続けてもらえると感じた。

このテーマでは、日本人と外国人が同じ職場で働くには異文化を理解し試行錯誤が重要であると感じました。

テーマ②「円安という逆風を超えて海外からの人材を獲得するためにはどうすればよいのか？」

関口氏：日本が発展していてほかの国が遅れているというスタンスは崩れてきている。ほかの国より日本で働く方がいいと思ってもらう体制づくり、海外の方と働くからよい製品ができるという発想に変えないとジリ貧になるのではないかと。

他の3氏からも「エンジニア枠では同行した配偶者が働けない、また転職ができない。外国人実習制度なども外国人が日本で働きたいと思うように改定する余地がある」との意見がありました。「日本人が勝っているという発想はやめるべきだ。外国人の管理職も活躍している」との意見も出され、このテーマでは、日本はもう別格ではなく、海外からの人材を獲得するには、日本人と区別してはいけないということ、そして高い目線で外国人の能力を重視するべきであると感じました。

テーマ③「中国をはじめとしたアジア諸国に対して、各社5年後、10年後の戦略は？」

水野氏：中国での日系建機メーカーは撤退ムード。ローカルが発展してきて難しい局面である。

関口氏：日本製だから品質がよく買ってくれるとのことはおごりは持たず、中国に協力してもらって売れる商品を開発する方がよい。

合田氏：ウレタン製品は、中国ではレベルの高いものは買ってくれる。高付加価値の製品を作っていくべきである。

高橋氏：エンジンバルブは少なくなっているが、日本車は優れている。日本の良さをどう売るか？海外は日本の何を評価しているかを研究する。品質だけでなく信頼関係もある。

このテーマでは、中国との付き合いについて、大国を無視してはいけないが、リスクヘッジが必要であると感じました。

今回は豪華パネラーをお迎えして行うパネルディスカッションという新しい形式からそれぞれのポジションでの意見を聞くことができ、とても有意義な例会となりました。今後の日本経済に対して後ろ向き意見が多い中、国際社会において多くの経験をお持ちの4人の方から「国際競争力では厳しい状況下に置かれている日本もまだまだ捨てたもんじゃない、日本の魅力をうまく発揮できれば将来につながる」と気づかせていただいた例会となりました。

文：日中経済交流研究会 広報委員会
南陽トレーディング(株) 里深 陽子